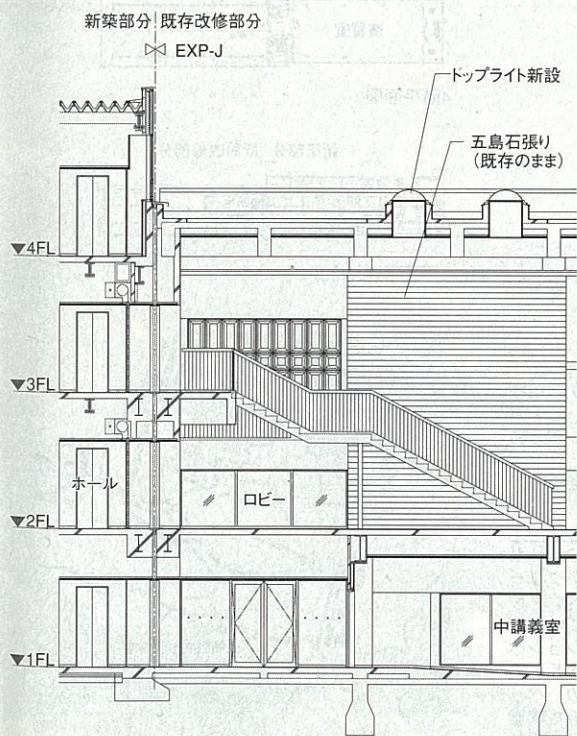




橋湾側から見た校舎。旧長崎水族館は、砂浜に平行な一文字の長いブロック形につくられた。校舎の両側に広がる池は周囲の豊かな緑とともに、癒しの空間を提供する



断面詳細図 (1/200)

保存再生方法に対する疑問の声

市民を交えた論議が不十分だった

中村享一設計室代表・
建築再生デザイン会議副議長
中村 享一

旧長崎水族館の保存再生につ
いては、建物の半分が残ったこ
とを、一定の評価をしたいが、

完成後のデザインを見てやはり問題が残った。

旧長崎水族館は、戦後復興期、広島に建設された一連の建築物と同等の位置付けにあったと思う。にもかかわらず保存再生をめぐる、市民を交えた十分な論議が行われたとは考えにくい。公共建築の真の所有者は市民である。その意味でも、行政は今日までの経過を踏まえて、再度、検証すべきだ。

いまから少なくとも6年間の歳月を顧みて、旧長崎水族館の再生がどのように行われたのか、いずれ旧長崎水族館の関係者が一堂に集まり、論じ合う場が必要だと思う。その結果、建築物の保存再生が抱える多くの問題点と解決する糸口が必ず見つかるはずだ。今後、数多くの建築物が保存再生を迫られる。その際には、旧長崎水族館の保存再生が反面教師として生かされることを望みたい。